

## 死をどのように考えてきたのか②

おやさと研究所教授  
堀内 みどり Midori Horiuchi

2012年10月8日、今年のノーベル医学・生理学賞に、山中伸弥京都大学教授が選ばれました。よく知られているように、体のさまざまな組織や臓器になるとされる「iPS細胞」を作り出すことに世界で初めて成功した研究者です。3日前には、そのiPS細胞の研究で大きな進展があったとして、京都大学の研究グループがマウスのiPS細胞から卵子を作り出し（去年、マウスのiPS細胞から精子を作り出すことにも成功しています）、体外受精を行ってマウスを誕生させることに世界で初めて成功し、慶応大学のグループが、ヒトのiPS細胞から精子や卵子の元になる「始原生殖細胞」<sup>しげんせいしよくさいぼう</sup>を作ることに成功したことが報じられました。研究は卵子や精子が出来る仕組みを明らかにし、不妊の原因や治療法を探ることをねらいとしているということです。精子と卵子が受精して始まる生命の神秘というメカニズムが、iPS細胞で作られた精子と卵子によって実験室で再現されようとしています。

「誕生」は多くの場合、喜びをもって迎えられます。しかしながら、私たちはその後さまざまな出来事を通して喜怒哀楽を経験し、そして、死にいたることになります。ブッダは生きるものすべてにとって「生老病死」は避けられない苦しみであると説きました。

## 生老病死：四苦

ブッダを開祖とする仏教はおよそ2500年前にインドで誕生しました。中国では古い時代には「仏」という字で音写し、のちに「仏陀」という字をあて、それが日本でも使用されています。ブッダは「覚者」「真理をさとった人」という意味をもつ名詞ですが、仏教の開祖個人をいう時には「ゴータマ・ブッダ」が一般に用いられるようです（中村元『ゴータマ・ブッダ—釈尊の生涯—』中村元選集第11巻、春秋社、昭和54年第6刷、p.11）。ここでは、ブッダを用います。日本では、「お釈迦様」ともいいますが、これはブッダが「釈迦（シャカ、シャーキャ）族」に属したことに由来し、「釈尊」は釈迦族の尊者ということになります。

ブッダは、王子として生まれ、恵まれた幸福な生活を送ったと伝えられています。後に修行僧たちに、父の館にある蓮池に咲く紅や白の蓮の花に喜び、自室に焚かれた香しい香を楽しみ、上等の衣服をまとい、そして3つの宮殿を持っていたことなどを回想して語っています。その彼がなぜ、その生活を捨て、妻子父母を去って、出家という道を選んだのでしょうか。

わたくしはこのように裕福で、このように極めて優しく柔軟であったけれども、次のような思いが起こった。一愚かな凡夫は、みずから老いてゆくもので、また、老いるのを免れないのに、他人が老衰したのを見て、考え込んでは、悩み、恥じ、嫌悪している。われもまた老いゆくもので、老いるのを免れない。自分こそ老いゆくもので、同様に老いるのを免れないのに、他人が老衰したのを見ては、悩み、恥じ、嫌悪するであろう。—このことはおのれにはふさわしくない、と言って。わたしはこのように観察したとき、青年時における青年の意気は全く消え失せてしまった。（同上、p.65）

同様に、「病」「死」を観察して、「健康時における健康の意気は全く消え失せてしまった」「生存時における生存の意気は全く消え失せてしまった」（同上、pp.65～66）と、「凡夫（異生）」を自分に引き当てた反省をしています。いつまでも若々しくありたい、健康であって病気にならないように、そして、死なないようにと願ってしまう人間の生存に根ざしたともいえるこうした希望は決して叶うことはありません。このブッダの若い日々における悩みは、後に、「若さの驕り」「健康の驕り」「いのちの驕り」という3つの驕りを表現するものと考えられました。この驕りは人間に本質的なもので、空虚だともいわれます（同上、p.67）。

出家前のブッダが、凡夫の立場に自分を置いた時、自分の若い日の生活は極めて幸福であり、苦を知らない生活だったけれども、自分もまた老いて、病んで、死にゆくものである人間であるのに、他人の老病死を嫌悪していたと、自分の存在を省察し、老病死を不安に思い苦しむ人間のあり方を見出して、ついには出家に踏み切ったと解されるでしょう。なぜ、人は若さや健康や不死を望むのか、望んでも人は老いて、時には病気で苦しみ、やがては死ななければならないというのに。そうした思いを解放させること、そうした思いに囚われ煩わされないこと、換言すれば、なぜ私は生きているのか、私とは何であるのかという、私たち人間が持つ根源的な問いのこたえを求めてブッダは出家していったのだと感じます。そして、ブッダの覚りは、「一切皆苦」「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂靜」と整理された形で知ることができます。

さて、ブッダが生きていた頃のインドでは、すでにいわゆる「輪廻」という思想が人々に受け入れられていたと思われています。王族からバラモンに伝授された「二道五火説」と呼ばれるものに輪廻の説が含まれていると考えられているのです。それは「神の道」と「祖霊の道」を区別する「二道説」で、5種の祭火への献供による人間の出生を説く「五火説」は、バラモンによるその祭儀神秘主義である（長尾雅人・服部正明「インド思想の潮流」『バラモン教典 原始仏典』中公パックス世界の名著1、中央公論社、昭和54年、p.26）とされます。

二道説では、死者は次のようにして再生します。

死んで火葬された者は、定めに従って、光の道か闇の道を経て月に至る。光の道を行つた者は、月からさらに不死の世界におもむくが、闇の道を行つた者は、雨となって再び地上へもどってくる。（同上）

光の道が「神の道」で、闇の道が「祖霊の道」になります。この説は水と関連し、「水は雨として地上に降り、植物に吸収されて養分となり、それを食べた人間の精子となり、母体に入って人間として生まれる」とします。さらに、死んだ人間は光か闇かの道を通って月にいきますが、その月は水をためておく容器なので水が一杯になると雨になって降るので月が欠けるとも説かれているものです（同上、「チャンドギヤ・ウパニシャッド」5章3～5節）。